

## ジェンダー研究所彙報&lt;平成 28 年度&gt;

(平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日)

職名は発令時による

## 平成 28 (2016) 年度研究プロジェクト概要

	年月日	テーマ	報告者、評者等
IGS セミナー	平成 28 年 6 月 8 日	生殖領域シリーズ：「AID 出生者のトナー情報を得る権利」	【報告】久慈直昭（東京医科大学教授） 【司会／報告】仙波由加里（IGS 特任 RF） 担当：仙波由加里（同）
	平成 28 年 6 月 30 日	「ポスト新自由主義の未来を想像するエクアドル市民革命の クィアな（不）可能性」	【講演】エイミー・リンド（米・シンシナティ大学女性・ジェンダー・セクシュアリティ研究学部長／教授） 【司会／院生ファシリテーター】本山央子（本学博士後期課程） 担当：足立真理子（IGS 教授）、臺丸谷美幸（IGS 特任 RF）
	平成 28 年 7 月 27 日	生殖領域シリーズ：「同性カップルの家族づくりと AID」	【報告】東小雪（LGBT アクティビスト）、青山真侑（にじいろかぞく 副代表） 【ファシリテーター】仙波由加里（IGS 特任 RF） 担当：仙波由加里（同）
	平成 28 年 7 月 29 日	「訳者と語る『京城のモダンガール：消費・労働・女性から見た植民地近代』：コロニアリズム／ポストコロニアリズム／ネオコロニアリズムの射程と「女」の位置」	【司会】臺丸谷美幸（IGS 特任 RF） 【講演】姜信子（作家）、高橋梓（東京外国語大学博士後期課程） 【ディスカッサント】足立真理子（IGS 教授） 担当：臺丸谷美幸（同）
		「午後の部／非公開」 「書評会：訳者と語る『京城のモダンガール：消費・労働・女性から見た植民地近代』」 【主催】IGS 【共催】ポストコロニアル法理論研究会	【総合司会】臺丸谷美幸（同） 【報告】板橋晶子（中央大学兼任講師）、磯山久美子（本学兼任講師）、臺丸谷美幸（同）、尹智昭（日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学準教授）、土野瑞穂（本学 RF）、岡崎まゆみ（帯広畜産大学専任講師）、吉良貴之（宇都宮共和大学専任講師）、崔世卿（早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員） 【応答】高橋梓（同） 担当：臺丸谷美幸（同）
	平成 28 年 10 月 24 日	第 1 回「冷戦とジェンダー」研究会／キックオフシンポ	【司会】岡崎まゆみ（帯広畜産大学専任講師） 【話題提供】幸田直子（近畿大学専任講師） 【報告】臺丸谷美幸（IGS 特任 RF） 【応答】兼子歩（明治大学専任講師） 担当：臺丸谷美幸（同）
	平成 28 年 11 月 10 日	生殖領域シリーズ：「出生前検査をめぐる倫理」	【ファシリテーター】仙波由加里（IGS 特任 RF） 【報告】キャサリン・ミルズ（豪・モナシュ大学）、武藤香織（東京大学准教授） 【ディスカッサント】石田安実（本学特任准教授） 担当：仙波由加里（同）
	平成 28 年 12 月 12 日	2016 年度第 1 回「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会「台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開」 【主催】特定非営利活動法人アジア女性資料センター 【共催】IGS プロジェクト「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会	【司会】申琪榮（IGS 准教授） 【講師】福永玄弥（日本学術振興会特別研究員） 担当：申琪榮（同）

IGSセミナー	平成 29 年 2 月 22 日	「日本における女性と経済学」	<p>【司会】板井広明 (IGS 特任講師)</p> <p>【報告】上村協子 (東京家政学院大学教授)、栗田啓子 (東京女子大学教授)、松野尾裕 (愛媛大学教授)、生垣琴絵 (沖縄国際大学専任講師)</p> <p>【討論】池尾愛子 (早稲田大学教授)、足立真理子 (IGS 教授)、金野美奈子 (東京女子大学教授)</p> <p>【論点提供】伍賀惜子 (元大阪総評オルグ、元関西女の労働問題研究会代表)</p> <p>担当：板井広明 (同)</p>
IGS 国際シンポジウム	平成 28 年 4 月 11 日	「金融化、雇用、ジェンダー不平等」	<p>【司会】板井広明 (IGS 特任講師)</p> <p>【講演】ジョヨッティ・ゴース (印・ジャワハルラル・ネルー大学教授)、C.P. チャンドラシェーカー (印・ジャワハルラル・ネルー大学教授)</p> <p>【ディスカッサント】伊藤誠 (東京大学名誉教授)</p> <p>【閉会の辞】足立真理子 (IGS 教授)</p> <p>担当：足立真理子 (同)</p>
	平成 29 年 3 月 18 日	<p>「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか? : ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙」</p> <p>【主催】IGS、JAWS</p> <p>【後援】明治大学ジェンダーセンター</p>	<p>【総合司会】申琪榮 (IGS 准教授)</p> <p>【開会挨拶】猪崎弥生 (本学副学長/グローバル女性リーダー育成研究機構長/教授)、メリアン・パリー (米・デラウェア大学名誉教授)</p> <p>【特別講演】メリッサ・デックマン (米・ワシントン大政治学科学科長/教授)、ジュリー・ドーラン (米・マカレスト大学)</p> <p>【ラウンドテーブル】「多様性の視点から見たトランプ政策」</p> <p>メリッサ・デックマン (同)、ジュリー・ドーラン (同)、メリアン・パリー (同)、武田宏子 (名古屋大学教授)、申琪榮 (同)</p> <p>担当：申琪榮 (同)</p>
IGS 研究会	平成 29 年 1 月 30 日	第 2 回「冷戦とジェンダー」研究会「『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス：アメリカ合衆国の動向に注目して」	<p>【司会】山本めゆ (日本学術振興会特別研究員 PD)</p> <p>【報告】土野瑞穂 (本学みがかずば研究員)、武田興欣 (青山学院大学教授)、申琪榮 (IGS 准教授)、臺丸谷美幸 (IGS 特任 RF)</p> <p>担当：臺丸谷美幸 (同)</p>
	平成 29 年 3 月 16 日	<p>IGS 研究会</p> <p>午前の部「生と医療のジェンダー政治学」</p> <p>午後の部「ジェンダーと政治的代表性」</p> <p>【主催】IGS、JAWS</p> <p>【後援】明治大学ジェンダーセンター</p>	<p>午前の部【司会】田中洋美 (明治大学准教授)</p> <p>【報告】メリアン・パリー (米・デラウェア大名誉教授)、武田宏子 (名古屋大学教授)、仙波由加里 (IGS 特任 RF)</p> <p>午後の部【司会】申琪榮 (IGS 准教授)</p> <p>【報告】大木直子 (本学グローバルリーダーシップ特任講師)、尹智炤 (日本学術振興会外国人特別研究員/米・カンザス大学准教授)</p> <p>【コメンテーター】岩本美砂子 (三重大学教授)</p> <p>担当：申琪榮 (同)</p>

IGSセミナー・国際シンポジウム(外国人特別招聘教授関連)	平成 28 年 6 月 9 日	国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較」	【報告】根本宮美子(京都外国語大学教授)、小野坂優子(ノルウェー・スタヴァンゲル大学准教授) 【ディスカッサント】スーザン・D・ハロウェイ(IGS 外国人特別招聘教授/米・カリフォルニア大学バークレー校教授)、石井クンツ昌子(IGS 所長/本学教授)
	平成 28 年 6 月 16 日	IGS セミナー “Family and Schooling in Contemporary Japan: Foreign Perspectives and Research”	【講師】スーザン・D・ハロウェイ(IGS 外国人特別招聘教授、米・カリフォルニア大学バークレー校教授) 【コーディネーター】石井クンツ昌子(IGS 所長/本学教授)
	平成 28 年 10 月 19 日	国際シンポジウム「女性、宗教、暴力: 国際的視点からの再考」	【コーディネーター/司会】エリカ・バッフェツリ(IGS 外国人特別招聘教授/マンチェスター大学准教授) 【基調講演】アトリー・セン(デンマーク・コペンハーゲン大学准教授) 【ディスカッサント】松尾瑞穂(国立民族学博物館准教授)、小川真理子(日本学術振興会特別研究員 PD)
	平成 28 年 11 月 8 日	IGS セミナー “The Lives of Samurai Women of the Edo Period”	【コーディネーター/司会】ラウラ・ネンツイ(IGS 外国人特別招聘教授/米・テネシー大学教授) 【講師】ルーク・ロバーツ(米・カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授)
	平成 28 年 11 月 25 日	IGS セミナー “Gender, Food, and Empire: Eating the Other in Hayashi Fumiko's Novels and Naruse Mikio's Adaptation Films”	【コーディネーター/司会】ラウラ・ネンツイ(IGS 外国人特別招聘教授/米・テネシー大学教授) 【講師】堀口典子(米・テネシー大学准教授)
	平成 28 年 12 月 4 日	IGS セミナー “Finding your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions”	【講師】エリカ・バッフェツリ(IGS 外国人特別招聘教授/英・マンチェスター大学准教授)
	平成 29 年 1 月 17 日	国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良: 炭谷小梅と中川横太郎」	【コーディネーター・司会】ラウラ・ネンツイ(IGS 外国人特別招聘教授/テネシー大学准教授) マーニー・S・アンダーソン(米・スミス大学准教授) 【コメンテーター】エリック・シッケタンツ(日本学術振興会外国人特別研究員)、石井紀子(上智大学教授)
研究交流会	平成 28 年 11 月 14 日	“The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis: A Discussion with Gender Scholars Sylvia Walby and Heidi Gottfried” 【主催】本学グローバルリーダーシップ研究所、IGS	【司会】カレン・シャイア(グローバルリーダーシップ研究所外国人特別招聘教授/独・デュースブルグ=エッセン大学教授)、大木直子(グローバルリーダーシップ研究所特任講師) 【報告】シルヴィア・ウォルビー(英・ランカスター大学教授)、ハイディ・ゴットフリート(米・ウェイン州立大学教授)

共催・協力セミナー等	平成 28 年 6 月 11 日	シンポジウム「イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて」 【主催】 科学研究費「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」(代表：長沢栄治) 【共催】 IGS、東京大学東洋文化研究所 班研究「中東の社会変容と思想運動」 (於：東京大学東洋文化研究所)	【開会の言葉・趣旨説明】 長沢栄治 (東京大学教授) 【総合司会】 後藤絵美 (東京大学准教授) 【第一部・報告】 鳥山純子 (日本学術振興会特別研究員 PD)、阿部尚史 (東京大学特任助教)、宇野陽子 (東京大学特任研究員) 【第二部・報告】 大河原知樹 (東北大学准教授)、松尾瑞穂 (国立民族学博物館准教授)、齊藤みどり (帝京大学講師) 【第三部】 白杵陽 (日本女子大学教授)、黒木英充 (東京外国語大学教授)、足立真理子 (IGS 教授) 【閉会の言葉】 鷹木恵子 (桜美林大学教授)
	平成 28 年 6 月 26 日	ジェンダー史学会シンポジウム「ポスト「戦後 70 年」とジェンダー史」 【主催】 ジェンダー史学会、IGS	【総合司会】 高橋裕子 (津田塾大学学長/教授) 【趣旨説明】 長志珠絵 (神戸大学教授) 【第 1 部：司会 / モデレーター】 平井和子 (一橋大学非常勤講師) 【報告】 高雄きくえ (ひろしま女性学研究所所長)、ヴェール・ウルリケ (広島市立大学教授)、高橋博子 (明治学院大学国際平和研究所研究員) 【第 2 部：討論】 【コメント】 貴堂嘉之 (一橋大学教授)、加藤千香子 (横浜国立大学教授)
	平成 28 年 9 月 19 日	『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう?』出版記念トークセッション 【主催】 性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会 (LGBT 法連合会)、IGS	【司会】 森谷佑未 (LGBT 法連合会) 【開会挨拶】 猪崎弥生 (本学副学長/グローバル女性リーダー育成研究機構長/教授)、池田宏 (特別配偶者法全国ネットワーク パートナー法ネット共同代表) 【出版報告】 綱島茜 (LGBT 法連合事務局長代理) 【パネルディスカッション司会】 神谷悠一 (LGBT 法連合会事務局長) 【報告者・パネリスト】 若林一夫 (世田谷区人権・男女共同参画担当課長)、瀬尾かおり (文京区総務部ダイバーシティ推進担当課長)、齊藤静子 (多摩市くらしと文化部平和・人権課長、TAMA 女性センター長) 【ビデオメッセージ】 長谷部健 (渋谷区長) 【特別報告】 熊坂義裕 (一般社団法人社会的包摂サポートセンター代表理事) 【活動提起】 原ミナ汰 (NPO 法人共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク代表理事) 【閉会挨拶】 永野靖 (LGBT 法連合会)
	平成 28 年 10 月 31 日	IGS セミナー「周産期精神疾患、母子間愛着、および情緒的コミュニケーション」 【主催】 本学グローバル人材育成推進センター、IGS	【司会・コーディネーター】 石田安実 (本学グローバル人材育成推進センター特任准教授) 【講師】 リンダ・M・ペレス (米・ミルズ大学教授)

## 1. 人事関係

## 構成員

【所長】 <在任期間>  
石井クンツ昌子（基幹研  
究院人間科学系教授） 2015（H27）年10月1日～  
2017（H29）年3月31日

## 【教員】

足立真理子（ジェンダー  
研究所教授） 2015（H27）年4月1日～  
申琪榮（ジェンダー研究  
所准教授） 2015（H27）年4月1日～

## 【研究員】

小玉亮子（基幹研究院人  
間科学系教授） 2015（H27）年7月1日～  
2017（H29）年3月31日  
棚橋訓（基幹研究院人間  
科学系教授） 2015（H27）年4月1日～  
2017（H29）年3月31日  
斎藤悦子（基幹研究院人  
間科学系准教授） 2015（H27）年4月1日～  
2017（H29）年3月31日

## 【外国人特別招聘教授】

スーザン・ハロウェイ（米・  
カリフォルニア大学バー  
クレー校教授） 2016（H28）年5月22日～  
6月29日  
エリカ・バップフェッリ（英・  
マンチェスター大学准教  
授） 2016（H28）年9月21日～  
12月20日  
ラウラ・ネンツイ（米・  
テネシー大学教授） 2016（H28）年10月3日～  
2017（H29）年7月31日

【日本学術振興会  
外国人特別研究員】

尹智焯（米・カンザス大  
学准教授） 2015（H27）年8月10日～  
2017（H28）年8月9日

## 【特任講師】

板井広明 2016（H28）年4月1日～  
2017（H29）年3月31日

## 【特任RF】

仙波由加里 2016（H28）年4月1日～  
2017（H29）年3月31日  
臺丸谷美幸 2016（H28）年4月1日～  
2017（H29）年3月31日  
吉原公美 2016（H28）年4月1日～  
2017（H29）年3月31日

【アカデミック・アシスタ  
ント】

梅田由紀子 2016（H28）年4月1日～  
2017（H29）年3月31日  
滝美香 2016（H28）年4月1日～  
2017（H29）年3月31日  
稲垣明子 2016（H28）年4月1日～  
2017（H29）年3月31日  
和田容子 2016（H28）年4月1日～  
2017（H29）年3月31日

## 2. 会議関係

<運営委員会の開催> 平成28年5月19日、6月7日、6  
月16日、11月10日、平成29年1月12日、2月2日、2  
月17日

## 3. 研究調査活動

## 1) IGS 研究プロジェクト

「アジアにおける『新中間層』とジェンダー」研究

【研究担当】足立真理子（IGS 教授）

## 【メンバー】

斎藤悦子（IGS 研究員／本学准教授）、堀芳枝（恵泉女学  
園大学准教授）、グレンダ・ロバーツ（早稲田大学教授）、  
スーザン・ヒメルヴァイト（英・オープン大学名誉教授）

## 【研究内容】

アジアにおける『新中間層』研究のための理論的作業と、  
継続している実証研究のまとめを行った。

とりわけ、2008年グローバル金融危機以降のアジア経済  
社会において、金融化とジェンダーの問題が喫緊の課題  
として浮かび上がっている。しかしながら、従来、金融  
化とジェンダーの関連は、理論的構成を含めほとんど研  
究されていない。そこで、フェミニスト経済学の「金融  
化とジェンダー」の最新知見を整理・統合することを試  
みた。

金融化の定義は、今日、ポストケインジアン派のミンス  
キー理論により、金融不安定性の問題に焦点が当てられ  
ている。これらの理論と従来のフェミニスト経済学が理  
論化してきた、メゾレベル分析の関連性が指摘されてい  
る。これらについて、詳細に検討するとともに、日本の  
現状についても資料を収集とインタビュー調査を実施し  
た。

「社会的企業とジェンダー」研究

【研究担当】足立真理子（IGS 教授）

## 【メンバー】

斎藤悦子（IGS 研究員／本学准教授）、スーザン・ヒメル  
ヴァイト（英・オープン大学名誉教授）

社会的企業の定義に関して、イギリスの文献や事例研究  
を行った。

社会的企業と近年注目されてきているシェアリング・エコノミーの関連について研究会を開催し、議論を行った。貨幣経済、市場交換、債権・債務関係等の従来の概念が市場経済を中心として定義されていることを確認し、非市場的諸要素が市場交換に代替する可能性や、企業活動が必ずしも利潤確保を目的としない場合の組織維持について分析した。

#### 「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】 申琪榮 (IGS 准教授)

【メンバー】 政治代表におけるジェンダーと多様性研究会 (GDRRep)、尹智昭 (日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学准教授)、大木直子 (本学グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

#### 【研究内容】

##### ■ 概要

東アジアは世界的に注目される経済発展を成し遂げた地域であるが、政治的民主主義の発展経路は統一ではない。とりわけ、女性の政治参画は、民主主義の歴史が長い日本において最も低い。他方で台湾は民主化以前から女性議員の割合が高く、民主化以降は3割をはるかに超えるようになった。韓国も、2000年代に入って十数年間女性議員が国会・地方議会において著しく増加した。これら東アジア国家において女性の政治的代表的性を高める・妨げる要因は何か、また、ジェンダー・多様性を生かした政治制度はどのように形成されるのか。本研究は、これらの課題に取り組み、日本、韓国、台湾における男女議員への調査を実施、比較分析し、相違点を明らかにすることを目的とする。

##### ■ 研究内容・今年度の成果

1. 国際シンポ後援：「女性参政権70周年記念シンポジウム 女性を議会へ 本気で増やす！」(上智大学2016年4月10日)。
2. GDRRep 研究会：「持続可能な女性代表性は得られるのか？—2016年の韓国総選挙とクォータ制度の15年」申琪榮報告(上智大学、2016年6月22日)。
3. IGS セミナー：「台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開」福永玄弥報告(2016年12月12日、

アジア女性資料センターと共催)。

4. 日本の国会議員(男女)にサーベイ質問表を集計、衆参議員16名にインタビュー実施。
5. 韓国の研究者らと打ち合わせ、質問表の韓国版作成、2017年2月に訪問アンケート実施。このため、韓国研究財団の「一般共同研究」(2016.11~2017.10)に応募し、採択された。

##### ■ 次年度への展望

2017年度は、日本の国会議員を対象として前年度に行ったサーベイ調査及びインタビュー資料を分析する。韓国においては、韓国研究チームとの協力のもと、アンケートの集計及びインタビューを実施する予定。その結果を持って論文の執筆を始める。一部日本、韓国のデータに基づき、ヨーロッパ、韓国の学会報告を予定している。さらに、台湾研究チームと打ち合わせし、台湾調査の準備を進める。

#### 【個人研究】リベラル・フェミニズムの再検討

【研究担当】 板井広明 (IGS 特任講師)

#### 【研究内容】

本研究プロジェクトの目的は、ウルストンクラフトやJ.S. ミルなど第1波フェミニズムあるいはリベラル・フェミニズムの思想・運動を再検討することにある。リベリズムの公私二元論を前提にしたリベラル・フェミニズムは乗り越えの対象でしかないという捉え方が一般的だが、リベリズムにおいて、「公」に対する「私」の領域は単に個人的自由の空間であると放任されるのではなく、不正義が存在すれば介入が正当化される空間でもあった。本研究では特に John Stuart Mill, *The Subjection of Women*, 1869のテキスト読解を通じて、そのことを明らかにするとともに、『女性の隷従』新訳を完成させ、リベラル・フェミニズム再検討の機運を盛り上げることを狙う。

今年度も翻訳作業は小沢佳史氏(神奈川大学非常勤講師)に協力してもらい、第1章について、英文の構造をチェックし、一文一文を丁寧に点検して、読みやすい翻訳文を目指し、ほぼ毎週オンラインで翻訳検討会を開いた。また秋からはJ.S. ミルの女性論を専門にしている山尾忠弘氏(慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程)にも参

加してもらい、テキストの知性史的背景などについても考慮しつつ、翻訳を進めた。

次年度はよりスピードアップして、翻訳検討を進め、また関連研究会の開催も検討している。

〔個人研究〕 第三者の関わる生殖医療で出生する子どもの福祉と社会における多様な家族のあり方の受容との関係性

【研究担当】 仙波由加里 (IGS 特任 RF)

【研究内容】

上記プロジェクトは、東京医科大学の久慈直昭教授と、城西国際大学の清水清美教授と3人ですすめている「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」と合同で実施した。2016年度は「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」で全5回の公開セミナーを開催したが、6月8日「AID 出生者のドナー情報を得る権利」（報告者：久慈直昭、仙波由加里、参加者22名）、7月27日「同性カップルの家族づくりとAID」（報告者：東小雪、青山真侑、参加者80名）の2回をIGSセミナー（生殖領域）としてお茶の水女子大学内で実施した。残り3回の公開セミナーは、8月30日、10月12日、12月14日に東京医科大学で開催した。この他、久慈、清水とともに、国内のAIDドナーやAIDで子どもを持ったヘテロカップルの親およびLGBTの親たちを対象にインタビュー調査も実施し、第28回日本生命倫理学会年次大会および第14回日本生殖心理学会でその調査結果を報告した。また学会誌『生命倫理』と『日本生殖看護学会誌』にも投稿中である。本研究および研究会は次年度も継続して行っていく。

さらに、11月10日はモナシュ大学のキャサリン・ミルズ氏と東京大学の武藤香織氏をスピーカーとして招き、お茶の水女子大学の石田安実をコメンテーターとして、「The Ethics of Prenatal Testing」というテーマで英語セミナーを開催した。参加者は12名で、本セミナーの内容は、報告書としてまとめ、3月に発行。

〔個人研究〕 朝鮮戦争期の日系アメリカ人兵士と市民権を巡る諸問題：ジェンダーとエスニシティの視点から

【研究担当】 臺丸谷美幸 (IGS 特任 RF)

【研究内容】

■ 概要

本研究は朝鮮戦争（1950-1953）に参戦した日系アメリカ人をジェンダーとエスニシティの視点から考察するものである。特に今年度はアメリカカリフォルニア州でのフィールド調査を実施し、朝鮮戦争へ従軍した人々の志願動機や帰還後の生活の変化について考察した。フィールド調査では日系人朝鮮戦争退役軍人会会員に対するインタビュー調査を実施した他、同州内での資料収集を行った。今後、調査成果は投稿論文として、今後発表するとともに、単著本刊行にむけた執筆を進めていく。

■ 今年度の成果・報告（招聘含む）

1. “Rethinking of Japanese American Resettlement and Military Service in 1950s: The Citizenship of a Californian *Nisei* Soldier in the Korean War in From Internment, to Korea, to Solitude: Memoir of Robert M. Wada.” Asia-Pacific Studies Seminar at Osaka University, 大阪大学、平成28年9月23日（招聘）
2. 「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍経験：ポストコロニアル的視座からの検討」ポストコロニアル法理論研究会第4回研究会、明治大学、平成28年11月21日（招聘）
3. 「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争従軍経験と社会参入：ジェンダーとエスニシティの視座から」、ジェンダー史学会第13回年次大会、武蔵大学、平成28年12月18日（査読あり）
4. 次年度2017年4月15日には、Annual conference of Association for Asian American Studies (AAAS) : “Unknown Heroes: Japanese American *Nisei* Military Service during the Korean War and Their Citizenship”（平成28年11月22日採択）にて前年度成果を報告予定である。

## 2) 外部資金による研究プロジェクト

「女性大統領と女性の政治的代表性：韓国の朴槿恵を中心に」

<科学研究費基盤研究C：平成26（2014）-平成29（2017）年度>

【研究担当】申琪榮（研究代表者・IGS准教授）

### 【研究内容】

#### ■ 概要

韓国では2012年の選挙で保守政党の女性大統領（朴槿恵）が誕生した。保守政権は伝統的なジェンダー規範を支持し、政治における女性の実質的な代表性（women's substantive representation）を損ないかねない指摘されてきたが、朴槿恵は「女性」を選挙のキーワードにして戦い、当選した。本研究は、朴槿恵大統領の在任期間を研究期間とし、朴政権の女性関連政策、政治制度、及び国政選挙（2016年）における政党の選挙戦略の変化を考察することで、保守政権の女性大統領が女性の実質的な政治代表性にどのような影響を及ぼしているのかを考察する。

#### ■ 研究内容と今年度の成果

1. 学会発表：IPSA（International Political Science Association）（2016.7. Poznan Poland）研究発表。
2. 一般公開講演：「パク・クネ：初の女性大統領の誕生と迷走」（2016.11. 上智大学）
3. 2015年10月から2016年9月までソウルにて在外研究。韓国にてフィールドワーク実施。専門家及び女性団体関係者と面談。
4. 朴槿恵政権のジェンダー政策（特に慰安婦問題関連）について『日本批評』15号へ論文投稿。

#### ■ 次年度以降の展望

2017年度は、最終年度になるため、主に成果発信に取り組む。具体的には、英語雑誌に投稿する論文を執筆するとともに、女性大統領（総じて政治的リーダー）のあり方と政治的代表性をテーマに国際シンポを企画する。

「女性の政治参画：制度的・社会的要因のサーベイ分析」

<科研費基盤研究C（15K03287）：2015（平成27）-2017（平成29）年度>

【研究担当】申琪榮（研究分担者・IGS准教授）、三浦まり（上智大学・研究代表者）

#### ■ 概要

政治代表における男女不均衡（女性の過少代表／男性の過大代表）はなぜ引き起こされ、どのように再生産されてきたのかを明らかにすることを目的とする。女性の政治参画を規定する制度的社会的要因を解明し、どのような制度改革と規範形成が過少代表の解消につながるかを明らかにするため、日本・韓国・台湾・ニュージーランドを比較分析する。

#### ■ 研究内容と今年度の成果

1. 国際シンポ開催：「女性参政権70周年記念シンポジウム 女性を議会へ 本気で増やす！」（上智大学2016年4月10日）、申琪榮2部司会。
2. 研究会開催：「政党行動と政治制度」セミナーシリーズを今年も続けて1回行った [第9回目持続可能な女性代表生は得られるのか？：2016年の韓国総選挙とクォータ制度の15年]、申琪榮報告（上智大学、2016年6月）
3. 日本の国会議員サーベイ質問表の集計、インタビュー実施
4. 4月の国際シンポの内容を起こし出版に向けて整理。

#### ■ 次年度以降の展望

2017年度は、回収した日本の国会議員に対するアンケートを分析、インタビューを起こして論文執筆に取り組む。日本の研究結果は、2017年度ECPG（European Conference on Politics and Gender）で報告予定。また、次年度も引き続き、政党行動と政治制度について専門家をお呼びしてセミナーを続けるほか、「東アジアにおける政治とジェンダー」IGS研究プロジェクトチームとの共催セミナーも開催する。韓国のアンケートも実施予定。

「日本の地方政治における女性の政治的代表性の研究」

<学術振興会特別研究員奨励費 (15F15741) : 平成 27 (2015) 年 8 月 - 平成 28 (2016) 年 8 月>

【研究担当】 申琪榮 (研究代表者・IGS 准教授)、尹智昭 (研究分担者・日本学術振興会外国人特別研究員／カンザス大学准教授)

【研究内容】

■ 概要

本研究は女性議員がもっとも多い東京都議会を事例として、政党は女性議員を増やすためにどのような戦略を取り上げているのか、そして、その結果として選出された議員は女性の利益をどのように代表しているのかを分析している。

■ 今年度の実施状況と成果

今年度の主な研究活動は次の通りである。2000 年代以来、東京都議会の会議録 (本会議・委員会) を検討し、女性の利益に関する政策トピックは何であり、誰 (議員性別・政党) がこのような政策トピックに言及するのかに関してデータを集めた。そして、その結果を学会で発表した。まず、2016 年の 6 月 24 - 27 日には日本・京都で開催された Association for Asian Studies Asia で、その後、2016 年 7 月 23 - 28 日にはポーランド・ポズナンで開催された International Political Science Association Meeting で日韓女性の政治的代表性に関する比較研究論文を発表した。その後、学会のパネリストからもらったコメントや指摘を反映して論文を書き直し、国際ジャーナルに投稿した。

■ 次年度への抱負、展望

今後は、東京都議会での女性利益の代表性に関する分析を深めようと考えている。具体的には、東京都議会現職の議員たちへのインタビューを行い、政党や議員たちが理解している女性利益というものは何かを探求する。そして、2017 年の 6 月 6 - 8 日にはスイス・ローザンヌで開催される European Conference on Politics and Gender で、その後、2017 年 6 月 24 - 27 日には韓国・ソウルで開催される Association for Asian Studies Asia で研究論文を発表する予定である。

「食の倫理と功利主義:食をめぐる規範・実践・ジェンダー」

<科学研究費基盤研究 C (24530214) : 平成 26 (2014) - 平成 28 (2016) 年度>

【研究担当】 板井広明 (研究代表者)

【研究内容】

本研究の概要は、功利主義的な食の倫理の研究の視点から昨今の食の倫理論を整理し、あるべき食の倫理の提示を行なうことにある。研究は 2 本立てで、第 1 は 18 世紀英国における人間と動物の区別・位置づけという思想的考察を行なう。第 2 は英米日の新たな食のネットワーク作りや運動の実態と特徴を比較しつつ、食と農、食と環境、ジェンダーの問題から規範的な食の倫理を検討し、現代のグローバルな経済社会における望ましい食の倫理を提案するものである。

今年度は改めてロンドン大学 (University College London) 所蔵のベンサム草稿にあたりとともに、受刑者の社会復帰プログラムとして食を位置付けるロンドン近郊の Brixton 刑務所での実践や、愛知県の福津農場など自然農法を実践している現場を参与観察し、食の倫理の問題圏の広さを確認した。

今後は規範的な食の倫理と農の現場での実践とをどう接合するかに焦点を合わせつつ、食の倫理の社会的な基盤について研究を広げる予定である。

「利己心の系譜学」

<科学研究費基盤研究 B (15H03331) : H27 (2015) -H29 (2017) 年度>

【研究担当】 板井広明 (研究分担者・IGS 特任講師)、太子堂正称 (研究代表者・東洋大学准教授)

【研究内容】

経済学が前提とする利己心という人間行動の基本動機を、歴史的・現代的文脈の中で根本的かつ総合的に分析し、その可能性と限界を見定め、現在の経済理論にそれをどのように反映させるか、あるいは競争の是非といった議論をいかに深めるかが、本研究の課題である。

今年度は、5 月 21 日に東北大学で開催された経済学学会で本研究プロジェクトの企画セッションを行ない、編者のひとり W. Hands 氏と英文論集出版に関する打ち

合わせを行なった。また11月には、東洋大学(11/12)と関西大学(11/19)で研究集会をもち、編者のひとりUskali Mäki氏と出版打ち合わせなどを行なった。

2017年2月には出版契約も済んだので、英文論集完成に向けて次年度は自らのペーパーをブラッシュアップする時期となる。

「AIDで生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」

<科研費基盤研究C(16K12111):2016(平成28)-2018(平成30)年度>

**【研究担当】** 仙波由加里(研究分担者・IGS特任RF)、清水清美(研究代表者・城西国際大学教授)

**【研究内容】**

城西国際大学の清水清美教授が研究代表者である平成28年度(2016年)から30年度(2018年)の文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)「AIDで生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」(課題番号:16K12111)の研究分担者として、AID関係者へのインタビューや文献調査を中心に研究をすすめてきた。本年度は、国内ではAIDで子どもを持った親や、レズビアンでAIDを利用して子どもを持った親、精子提供をした医師やゲイの男性にインタビュー調査を行った。2017年2月下旬から3月上旬にかけては、本研究の一環として、カンタベリー大学のケン・ダニエルズ氏の協力を得て、ニュージーランドのクライストチャーチ、ネルソン、オークランドで、AID当事者や関係者たちにインタビュー調査を実施し、さらに現地にてAID当事者への告知のための資料等を収集する。そして次年度は、本調査にて得られた情報をもとに、AIDで子どもを持った親や、AIDを利用しようとするカップル、またAIDにかかわっている専門家に向けたAIDで生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教育的目的を持つ教材作成に取り組む。さらに2018年の欧州生殖学会(ESHRE)の年次大会で報告することを目標に、調査結果をまとめ、報告の準備をしていく予定である。

「配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査」

<日本医療研究開発機構育成疾患克服等総合研究事業「生殖補助医療の技術の標準化と出生児の安全性に関する研究」(研究代表者・苛原稔徳島大学教授:2016(平成28)年度>

**【研究担当】** 仙波由加里(研究協力者・IGS特任RF)、上記課題研究分担者・久慈直昭(東京医科大学教授)

**【研究内容】**

日本医療研究開発機構育成疾患克服等総合研究事業「生殖補助医療の技術の標準化と出生児の安全性に関する研究」(研究代表者:苛原稔)の研究分担として、東京医科大学の久慈直昭教授が「配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査」を行っているが、その研究に研究協力員として参加している。本年度は、「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」の中で、慶應大学病院の看護師、坂中弘江と、根津マタニティークリニックのカウンセラー、渡辺みはる、国立成育医療センターの小泉智恵を招いて講演をお願いした。坂中は実際にAIDを希望するカップルにどのような情報をどのように提供しているのかについて話した。渡辺みはるの勤務する諏訪マタニティークリニックでは、不妊カップルの夫の父親の精子を使っての体外受精を行っているが、渡辺はこの技術を実施するまえにどのようなカウンセリングや準備が行われるのかについて話した。小泉は日本生殖補助医療標準化機関(JISART)に所属するクリニックで実施した卵子提供で子どもを持った親に、真実告知の意識調査を実施し、その結果報告を行った。そのほか、小泉氏とドイツのPetra Thorn氏が共同でおこなっている調査で、不妊クリニックのカウンセラーへのインタビューにも参加させてもらった。

「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争期の従軍経験:ジェンダーとエスニシティの視点から」

<竹村和子フェミニズム基金:平成27(2015)年7月-平成28(2016)年6月>

**【研究担当】** 臺丸谷美幸(個人研究・IGS特任RF)

## 【研究内容】

本研究の目的は朝鮮戦争へ志願した日系二世の女性（二世女性）に着目し、1950年代における二世女性の社会進出と従軍経験との関係について検討することである。本研究の詳細な成果は、竹村和子フェミニズム基金のHPにて公開中である。（[http://www.takemura-fund.org/data/2015/2015\\_report\\_4.pdf](http://www.takemura-fund.org/data/2015/2015_report_4.pdf)）

## ■ 今年度の実施状況

1. 1950年代の日系人コミュニティでの日系二世女性の従軍者に対する社会的イメージの解明のため1950年代当時のエスニック・メディアの記事分析を行った。
2. 重要先行研究である Cynthia Enloe 著、*Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*, (Berkeley[CA]: University of California Press, 2000) に収録されている“Chapter 6 Nursing the Military: The Imperfect Management of Respectability”の邦訳を進めた。
3. 2016年5月1日から14日まで米国カリフォルニア州にてフィールド調査を実施した。日系二世の退役軍人を対象としたインタビュー、及びUCLA 付属図書館、全米日系博物館での資料調査を実施した。
4. 上記の成果は、ジェンダー史学会第13回年次大会にて、「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争従軍経験と社会参入：ジェンダーとエスニシティの視点から」（平成28年12月18日、於：武蔵大学）として報告した。

「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入：ジェンダーとエスニシティの視点から」

<科学研究費若手研究B（16K16670）：H28（2016）- H30（2018）年度>

【研究担当】 臺丸谷美幸（研究代表者・IGS 特任 RF）

## 【研究内容】

本研究は、朝鮮戦争（1950-1953年）へ従軍した日系アメリカ人に関する研究である。朝鮮戦争期の従軍は、従軍者であった日系二世の生活や社会環境にいかなる影響をもたらしたのかについてジェンダーとエスニシティの視点から明らかにすることを目的とする。

初年度にあたる今年度は、朝鮮戦争期の二世兵士におけ

る社会的イメージの解明を目指した。初めに日本国内で入手可能な『Pacific Citizen』や『羅府新報』など新聞記事を用いた資料分析、映画や小説を元にした二世兵士像の分析に着手した。さらに2016年8月12日から9月3日の日程で、カリフォルニア州でフィールド調査を実施し、ロサンゼルス近郊に在住する退役軍人に対するインタビュー、UCLA 附属図書館および日系人関連団体で資料収集を行った。調査期間中の特筆すべき成果として、ロサンゼルス日系人街（リトルトーキョー）で開催される、日系人のお祭りである Nisei Week（2016年8月13-14日）にて、日系人グループのパレードに参加する朝鮮戦争退役軍人会のメンバーと2日間全日程、行動を共にした参与観察ができた。今年度の成果は次年度に論文として学会誌に投稿を計画しており、最終的には単著としてまとめ、2019年度内の刊行を目指す。

## 3) 外国人特別招聘教授によるプロジェクト

The Changing Contexts of Family Life and Early Childhood Education and Care in Japan

【研究担当】スーザン・ハロウェイ (Susan D. HOLLOWAY・米・カリフォルニア大学バークレー校教授)

## 【研究内容】

As a visiting scholar at Ochanomizu University, I was able to pursue work on three research themes. The first theme concerns the economic and institutional conditions that affect Japanese parents' efforts to balance work with family activities. During my residence period, I worked on an empirical paper showing that Japanese men's potential earnings relative to that of their wives are a significant predictor of the couple's choices regarding work and family chores. I also organized a symposium that took place at Ochanomizu University on June 9. The symposium featured presentations by several well-known scholars on work, family, and individual well-being in Japan and Norway.

A second focus was to organize a follow-up to the study I published in my 2010 book, *Women and Family in Contemporary Japan*. This research examines the

daily experiences of women who are parenting young children, looking particularly at their close relationships with spouse and professionals as a potential source of support. By comparing the original survey and interview data to a new dataset, I can identify how parenting discourses and perceptions have changed over the past 15 years.

The third project was to learn about recent changes concerning policy and practice in the early childhood care and education in Japan. I conducted informal interviews and conversations with leading members of the ECEC community in Tokyo and Osaka. I also visited four *youchien* (two national-university affiliated and two under private auspice), and three child-care centers (*kodomo-en* or *hoikuen*), as well as one parent-support center.

Women, Religion and Violence in International Perspective: Roles of Female Members in Aum Shinrikyō

【研究担当】 エリカ・バッフェッリ (Erica BAFPELLI・英・マンチェスター大学准教授)

【研究内容】

The three months I spent at the Institute for Gender Studies were extremely stimulating and fruitful, both from the point of view of developing current as well as new research projects.

On October, 19, 2016, I organized an international symposium titled, “Women, Religion and Violence in International Perspective.” The aim of the symposium was to discuss the involvement of women in radical political and religious movements, to consider different methodologies and approaches to the study of gender and conflict, and to foster a discussion on violence, terrorism and religion through the analysis of motivations, representations and re-elaboration of violent acts.

On December 14, 2016, a seminar titled, “Finding Your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese

New Religions” was held at Ochanomizu University. The aim of the seminar was to discuss fieldwork from methodological and theoretical points of view, using my 15 years’ experience of working with Japanese “new religions” (*shinshūkyō*) in Japan.

During my stay at Ochanomizu University, I started developing two new research projects:

(1) A new book project (with Professor Ian Reader, University of Manchester) that examines “new religions” or New Religious Movements (NRMs) in Japan in the modern era, with a prime focus on movements that became widely known in the 1980s and early 1990s. And (2) a new research project on women, religion and violence. The project is part of a larger research network I am developing with Dr. Atreyee Sen (University of Copenhagen) investigating the participation of women in radical political and religious movements. In particular, my current project focuses on women (ex-) members of Aum Shinrikyō. Furthermore, I have worked on a new volume I will co-edit with Professor Fabio Rambelli (University of California, Santa Barbara) on critical terms for the study of religion in Japan (Bloomsbury). The volume will include more than 20 collaborators from universities from different countries, including Japan, the UK, the US, Norway, Canada, the Netherlands, Italy, and Germany.

After Dark: The Nighttime in Nineteenth Century Japan

【研究担当】 ラウラ・ネンツイ (Laura NENZI・米・テネシー大学教授)

【研究内容】

My research project, titled *After Dark*, looks at the perception of the night in early modern Japan, with a focus on the nineteenth century. It then situates the case of late-Tokugawa Japan within a global context.

I contend that, despite the modern characterization of the Tokugawa period as an age defined by darkness and by a quaint closeness to the forces of nature,

nineteenth-century depictions and accounts of nocturnal landscapes show that in the Tokugawa era the nighttime was treated as a moment apart, one to be dealt with cautiously.

One part of the project looks at the gendered implications of the night. In the realm of popular culture, gender informed the fears enticed by the night (for example in the case of female ghosts). For the authorities, controlling the nighttime and its spaces and activities was a way of buttressing the status system and of maintaining social order, which included the management of issues related to gender.

In Tokugawa Japan, controlling the nighttime necessitated the replication (and possibly even the reinforcement) of norms pertaining to gender and patriarchy. When tensions erupted (as with the *eejanaika* phenomenon of 1867), the night became the time when the hetero-normative rules enforced during the day came into question, ambiguity took center stage, and unorthodox behaviors became possible.

#### 4. 研究交流・社会連携部門

平成28年4月から平成29年3月の間の活動は次の通りである。

##### 1) IGS セミナー (IGS 専任教員・特任教員・特任 RF 担当分)

①平成28年6月8日

生殖領域シリーズ:「AID 出生者のドナー情報を得る権利」  
【報告】久慈直昭(東京医科大学教授)「ドイツ・イギリス・ベルギーの状況」

【司会/報告】仙波由加里 (IGS 特任 RF) 「英国・オランダ・ドイツ・米国の状況」

担当: 仙波由加里 (同)

②平成28年6月30日

「ポスト新自由主義の未来を想像する エクアドル市民革命のクシアな(不)可能性」

【講演】エイミー・リンド(米・シンシナティ大学女性・ジェ

ンダー・セクシュアリティ研究学部長/教授)

【司会/院生ファシリテーター】 本山央子 (本学博士後期課程)

担当: 足立真理子 (IGS 教授)、臺丸谷美幸 (IGS 特任 RF)

③平成28年7月27日

生殖領域シリーズ:「同性カップルの家族づくりと AID」

【報告】 東小雪 (LGBT アクティビスト) 「日本におけるレズビアンマザー」

青山真侑 (にじいろかぞく副代表) 「日本で子育てするセクシュアル・マイノリティ親」

【ファシリテーター】 仙波由加里 (IGS 特任 RF)

担当: 仙波由加里 (同)

④平成28年7月29日

「訳者と語る『京城のモダンガール:消費・労働・女性から見た植民地近代』:コロニアリズム/ポストコロニアリズム/ネオコロニアリズムの射程と「女」の位置」

【司会】 臺丸谷美幸 (IGS 特任 RF)

【講演】 姜信子 (作家) 「私はいかにして植民地のモダンガールに出会ったか」

高橋梓 (東京外国語大学博士後期課程) 「京城の『モダンガール』とは誰なのか: 訳者として日本語版『京城のモダンガール』にかかわって」

【ディスカッサント】 足立真理子 (IGS 教授)

[午後の部/非公開]

「書評会: 訳者と語る『京城のモダンガール:消費・労働・女性から見た植民地近代』」

【総合司会】 臺丸谷美幸 (同)

【報告】 板橋晶子 (中央大学兼任講師)、磯山久美子 (本学兼任講師)、臺丸谷美幸 (同)、尹智焯 (日本学術振興会外国人特別研究員/カンザス大学準教授)、土野瑞穂 (本学 RF)、岡崎まゆみ (帯広畜産大学専任講師)、吉良貴之 (宇都宮共和大学専任講師)、崔世卿 (早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員)

【応答】 高橋梓 (同)

【主催】 IGS 【共催】 ポストコロニアル法理論研究会

担当：臺丸谷美幸（同）

⑤平成 28 年 10 月 24 日

第 1 回「冷戦とジェンダー」研究会／キックオフシンポ

【司会】岡崎まゆみ（帯広畜産大学専任講師）

【話題提供】幸田直子（近畿大学専任講師）“A Social History of the Cold War”

【報告】臺丸谷美幸（IGS 特任 RF）「調査報告：日系アメリカ人朝鮮戦争従軍兵士によるトランスナショナルな記憶の構築」（H 27 年度 竹村和子フェミニズム基金助成 活動報告）

【応答】兼子歩（明治大学専任講師）

担当：臺丸谷美幸（同）

⑥平成 28 年 11 月 10 日

生殖領域シリーズ：「出生前検査をめぐる倫理」

【ファシリテーター】仙波由加里（IGS 特任 RF）

【報告】キャサリン・ミルズ（豪・モナシュ大学准教授）“Gender, Disability and Bodily Norms in Prenatal Testing and Selective Termination of Pregnancy”

武藤香織（東京大学准教授）“Ethics and Governance of Non-invasive Prenatal Testing in Japan”

【ディスカッサント】石田安実（本学グローバル人材育成推進センター特任准教授）

担当：仙波由加里（同）

⑦平成 28 年 12 月 12 日

2016 年度第 1 回「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会「台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開」

【主催】特定非営利活動法人アジア女性資料センター

【共催】IGS プロジェクト「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会

【司会】申琪榮（IGS 准教授）

【講師】福永玄弥（日本学術振興会特別研究員）

担当：申琪榮（同）

⑧平成 29 年 2 月 22 日「日本における女性と経済学」

【司会】板井広明（IGS 特任講師）

【報告】上村協子（東京家政学院大学教授）、栗田啓子（東京女子大学教授）、松野尾裕（愛媛大学教授）、生垣琴絵（沖縄国際大学専任講師）

【討論】池尾愛子（早稲田大学教授）、足立真理子（IGS 教授）、金野美奈子（東京女子大学教授）

【論点提供】伍賀借子（元大阪総評オルグ、元関西女の労働問題研究会代表）

担当：板井広明（同）

2) 国際シンポジウム（IGS 専任教員・特任教員・特任 RF 担当分）

①平成 28 年 4 月 11 日

「金融化、雇用、ジェンダー不平等」

【司会】板井広明（IGS 特任講師）

【講演】ジョヨッティ・ゴーシュ（印・ジャワハルラル・ネルー大学教授）「金融危機と女性の経済的状況」

C.P. チャンドラシェーカー（印・ジャワハルラル・ネルー大学教授）「アジアにおける金融と不安定性」

【ディスカッサント】伊藤誠（東京大学名誉教授）

【閉会の辞】足立真理子（IGS 教授）

担当：足立真理子（同）

②平成 29 年 3 月 18 日

「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？：ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙」

【総合司会】申琪榮（IGS 准教授）

【開会挨拶】猪崎弥生（本学副学長／グローバル女性リーダー育成研究機構長／教授）、メリアン・バリー（米・デラウェア大学名誉教授）

【特別講演】メリッサ・デックマン（米・ワシントン大学政治学科学科長／教授）「トランプ時代におけるジェンダー・ギャップ：2016 年大統領選で女性有権者の投票行動から何を学ぶか」

ジュリー・ドーラン（米・マカレスト大学）「女性大統領候補：2016 年大統領選におけるジェンダーの役割」

【ラウンドテーブル】「多様性の視点から見たトランプ政

策]

メリッサ・デックマン (同)、ジュリー・ドーラン (同)、  
メリアン・パリー (同)、武田 宏子 (名古屋大学教授)、  
申琪榮 (同)

【主催】IGS、JAWS 【後援】 明治大学ジェンダーセンター  
担当：申琪榮 (同)

### 3) IGS 研究会

①平成 29 年 1 月 30 日

第 2 回「冷戦とジェンダー」研究会「『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス：アメリカ合衆国の動向に注目して」

【司会】山本めゆ (日本学術振興会特別研究員 PD)

【報告】土野瑞穂 (本学みがかずば研究員)「アジア女性基金解散後の日本政府による『慰安婦』問題への対応：アジア女性基金フォローアップ事業を中心に」

武田興欣 (青山学院大学教授)「『慰安婦』決議をどう読むか：アメリカ連邦議会研究者の立場から」

申琪榮 (IGS 准教授)「新刊紹介 山口智美他著『海を渡る「慰安婦」問題：右派の「歴史戦」を問う』」

臺丸谷美幸 (IGS 特任 RF)「慰安婦少女像建設運動を巡るローカルコミュニティの反応：アジア系アメリカ人を中心に」

担当：臺丸谷美幸 (同)

②平成 29 年 3 月 16 日

IGS 研究会／午前の部「生と医療のジェンダー政治学」

【司会】田中洋美 (明治大学准教授)

【報告】メリアン・パリー (米・デラウェア大名誉教授)  
“Some Possible Scenarios for the Future of Women's Health Care in a Trump Administration”

武田宏子 (名古屋大学教授)「政治課題としての日常生活」

仙波由加里 (IGS 特任 RF)“Government Subsidized Project for The Cost of Infertility Treatments As a Population Policy in Japan”

IGS 研究会／午後の部「ジェンダーと政治的代表性」

【司会】申琪榮 (IGS 准教授)

【報告】大木直子 (本学グローバルリーダーシップ特任講師)

“How 'Politics School' Promote Women's Participation in Politics in Japan”

尹智昭 (日本学術振興会外国人特別研究員／米・カンザス大学准教授)“Who Speaks for Women and Why: Evidence of Substantive Representation in the Tokyo Metropolitan Assembly”

【コメンテーター】岩本美砂子 (三重大大学教授)

【主催】IGS、JAWS 【後援】 明治大学ジェンダーセンター  
担当：申琪榮 (同)

### 4) IGS セミナー・国際シンポジウム (外国人特別招聘教授関連)

①平成 28 年 6 月 9 日

国際シンポジウム「家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較」

【報告】小野坂優子 (ノルウェー・スタヴァンゲル大学准教授)「仕事と家庭と幸福感：ノルウェーと日本の視点から」

根本宮美子 (京都外国語大学教授)「日本における未婚男性の幸福と家族の変化」

【ディスカッサント】

スーザン・D・ハロウェイ (IGS 外国人特別招聘教授／米・カリフォルニア大学バークレー校教授)、石井クンツ昌子 (IGS 所長／本学教授)

②平成 28 年 6 月 16 日

IGS セミナー “Family and Schooling in Contemporary Japan: Foreign Perspectives and Research”

【講師】スーザン・D・ハロウェイ (IGS 外国人特別招聘教授／米・カリフォルニア大学バークレー校教授)

【コーディネーター】石井クンツ昌子 (IGS 所長／本学教授)

③平成 28 年 10 月 19 日

国際シンポジウム「女性、宗教、暴力：国際的視点からの再考」【コーディネーター・司会】エリカ・バッフェツリ (IGS 外国人特別招聘教授／英・マンチェスター大学准教授)

【基調講演】 アートリー・セン（デンマーク・コペンハーゲン大学准教授）「女性とラディカルな運動：ジェンダーと紛争についての新しい視点を探る」

【ディスカッサント】松尾瑞穂（国立民族学博物館准教授）、小川真理子（日本学術振興会特別研究員 PD）

④平成 28 年 11 月 8 日

IGS セミナー “The Lives of Samurai Women of the Edo Period”

【コーディネーター・司会】ラウラ・ネンツイ（IGS 外国人特別招聘教授／米・テネシー大学教授）

【講師】ルーク・ロバーツ（米・カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）

⑤平成 28 年 11 月 25 日

IGS セミナー “Gender, Food, and Empire : Eating the Other in Hayashi Fumiko’s Novels and Naruse Mikio’s Adaptation Films”

【コーディネーター・司会】ラウラ・ネンツイ（IGS 外国人特別招聘教授／米・テネシー大学教授）

【講師】堀口典子（米・テネシー大学准教授）

⑥平成 28 年 12 月 4 日

IGS セミナー “Finding your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions”

【講師】エリカ・バッフェッリ（IGS 外国人特別招聘教授／英・マンチェスター大学准教授）

⑦平成 29 年 1 月 17 日

国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎」

【コーディネーター・司会】

ラウラ・ネンツイ（IGS 外国人特別招聘教授／米・テネシー大学准教授）

【講演】マーニー・S・アンダーソン（米・スミス大学准教授）「「ヤソがワシの色女を奪りゃあがった」：中川横太郎と炭谷小梅、19 世紀日本における生の変容」

【コメンテーター】エリック・シッケタンツ（日本学術振

興会外国人特別研究員）、石井紀子（上智大学教授）

## 5) 研究交流会

①平成 28 年 11 月 14 日

“The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis: A Discussion with Gender Scholars Sylvia Walby and Heidi Gottfried”

【主催】本学グローバルリーダーシップ研究所、IGS

【司会】カレン・シャイア（本学グローバルリーダーシップ研究所外国人特別招聘教授／独・デュースブルグ＝エッセン大学教授）、大木直子（本学グローバルリーダーシップ研究所特任講師）

【報告】シルヴィア・ウォルビー（英・ランカスター大学教授）、ハイディ・ゴットフリート（米・ウエイン州立大学教授）

## 6) その他の共催・協力セミナー等

①平成 28 年 6 月 11 日（於：東京大学東洋文化研究所）

シンポジウム「イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて」

【主催】科学研究費「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」（代表：長沢栄治）

【共催】IGS、東京大学東洋文化研究所 班研究「中東の社会変容と思想運動」

【開会の言葉・趣旨説明】長沢栄治（東京大学教授）

【総合司会】後藤絵美（東京大学准教授）

・第一部：私の研究とジェンダー

【報告】鳥山純子（日本学術振興会特別研究員 PD）、阿部尚史（東京大学特任助教）、宇野陽子（東京大学特任研究員）

・第二部：イスラーム・ジェンダー学の可能性

【報告】大河原知樹（東北大学准教授）、松尾瑞穂（国立民族学博物館准教授）、齊藤みどり（帝京大学講師）

・第三部：共同研究への期待

【報告】白杵陽（日本女子大学教授）、黒木英充（東京外国語大学教授）、足立真理子（IGS 教授）

【閉会の言葉】鷹木恵子（桜美林大学教授）

②平成 28 年 6 月 26 日

ジェンダー史学会シンポジウム「ポスト「戦後 70 年」とジェンダー史」

【主催】ジェンダー史学会、IGS

【総合司会】高橋裕子（津田塾大学学長／教授）

【趣旨説明】長志珠絵（神戸大学教授）

【第 1 部：司会／モデレーター】平井和子（一橋大学非常勤講師）

【報告】高雄きくえ（ひろしま女性学研究所所長）「被爆 70 年ジェンダー・フォーラム in 広島を終えて：『ヒロシマという視座の可能性』は見えたのか？」

報告 2 ヴェール・ウルリケ（広島市立大学教授）「国家と地域を横断する地域の女性運動：広島の「デルタ・女の会」」

報告 3 高橋博子（明治学院大学国際平和研究所研究員）「ヒロシマはどこに向かうのか：抑止論にあらがう」

【第 2 部：討論】【コメント】貴堂嘉之（一橋大学教授）、加藤千香子（横浜国立大学教授）

③平成 28 年 9 月 19 日

『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう？』出版記念トークセッション

【主催】性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会（LGBT 法連合会）、IGS

【司会】森谷佑未（LGBT 法連合会）

【開会挨拶】猪崎弥生（本学副学長／グローバル女性リーダー育成研究機構長／教授）、池田宏（特別配偶者法全国ネットワーク パートナー法ネット共同代表）

【出版報告】綱島茜（LGBT 法連合事務局長代理）

【パネルディスカッション司会】神谷悠一（LGBT 法連合会事務局長）

【報告者・パネリスト】若林一夫（世田谷区人権・男女共同参画担当課長）、瀬尾かおり（文京区総務部ダイバーシティ推進担当課長）、齊藤静子（多摩市くらしと文化部平和・人権課長、TAMA 女性センター長）

【ビデオメッセージ】長谷部健（渋谷区長）

【特別報告】熊坂義裕（一般社団法人社会的包摂サポート

センター代表理事）

【活動提起】原ミナ汰（NPO 法人共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク代表理事）

【閉会挨拶】永野靖（LGBT 法連合会）

④平成 28 年 10 月 31 日

IGS セミナー「周産期精神疾患、母子間愛着、および情緒的コミュニケーション」

【主催】本学グローバル人材育成推進センター、IGS

【司会・コーディネーター】石田安実（グローバル人材育成推進センター特任准教授）

【講師】リンダ・M・ベレス（米・ミルズ大学教授）

#### 4. 関連研究会

①「フェミニスト経済学」研究会

【コーディネーター】足立真理子（IGS 教授）、伊田久美子（大阪府立大学教授）

②政治代表におけるジェンダーと多様性研究（GDRRep）

【コーディネーター】申琪榮（IGS 准教授）

【メンバー】三浦まり（上智大学教授）、ステイール・若希（東京大学准教授）

③「冷戦とジェンダー」研究会

【コーディネーター】臺丸谷美幸（IGS 特任 RF）

【メンバー】申琪榮（IGS 准教授）、宮内貴久（本学教授）、武田興欣（青山学院大学教授）、幸田直子（近畿大学専任講師）

#### 5. アジア工科大学院（AIT）との国際連携プロジェクト

【担当】足立真理子（IGS 教授）、申琪榮（IGS 准教授）、日下部京子（AIT 教授）、大橋史恵（武蔵大学准教授）、板井広明（IGS 特任講師）、ズザンナ・バラニャク（本学博士後期課程）

平成 13（2001）年度より継続する本学とアジア工科大学院大学（AIT）との大学間学術交流協定に基づく「ジェ

ンダーと開発」領域における大学院生の交換研修プログラムである。本学博士前期課程「フィールドワーク方法論」と「国際社会ジェンダー論」との協働プログラムであり、AITからの院生受け入れは8月末から9月頭、本学の院生派遣は9月に実施した。今年度のテーマは「Labor and Association from Gender Perspective」であり、11月30日に本学院生参加者による報告会を開いた。

## 6. 教育・研修部門

### 1) 学部出講・大学院担当

<人間文化創成科学研究科博士後期課程ジェンダー学際研究専攻>

足立真理子

ジェンダー政治経済学（前期）

ジェンダー政治経済学演習（後期）

フェミニスト経済学（前期）

フェミニスト経済学演習（後期）

ジェンダー学際研究論文指導（通年）

ジェンダー学際研究報告（基礎）（通年不定期）

ジェンダー学際研究報告（発展）（通年不定期）

申琪榮

比較政治論（通年不定期）

ジェンダー学際研究論文指導（通年不定期）

<人間文化創成科学研究科博士前期課程ジェンダー社会科学専攻>

足立真理子

ジェンダー基礎論（前期）

開発経済学（前期）

開発経済学演習（後期）

申琪榮

フェミニズム理論の争点（後期）

フェミニズム理論の演習（後期）

ジェンダー社会科学論（通年）

<学部>

足立真理子

文教育学部 ジェンダー2 グローバル経済とジェンダー（後期）

文教育学部 グローバル化と労働（1学期）

申琪榮

比較ジェンダー論（前期／後期）

板井広明

国際社会ジェンダー論（後期）

### 2) 外国人特別招聘教授担当授業

<人間文化創成科学研究科博士前期課程比較社会文化学専攻>

ラウラ・ネンツイ

歴史資料論特論（後期）

### 3) 海外からの研究者および留学生等の長期受け入れ（前年度より継続を含む）

①アメリカ・マリー・コーベル（仏・パリ政治学院、国際交流基金日本研究フェローシップ）

【担当】足立真理子（IGS教授）

【期間】平成27（2015）年7月1日 - 平成28（2016）年4月30日

②尹智焯（日本学術振興会外国人特別研究員／米・カンザス大学准教授）

【担当】申琪榮（IGS准教授）

【期間】平成27（2015）年8月10日 - 平成29（2017）年8月9日

## 7. 社会貢献

ジェンダー研究所

諸外国／国内の女性関係行政部門、民間団体（NGOの女性問題担当者等）、研究者等の視察受け入れ、高校生の訪問（インタビュー取材の受け入れ等）。

足立真理子 (IGS 教授)

<委員>

日本学術会議連携会員 (経済学)  
経済理論学会奨励賞選考委員会委員長  
ラウトリッジ国際賞選考委員会委員  
日本フェミニスト経済学会幹事

<講演等>

1. 2016年9月12日 国際ジェンダー学会報告
2. 2016年9月17日 基礎科学研究所2016年研究大会報告
3. 9月24-30日 アルザス日欧知的交流事業 日本研究セミナー、ストラスブール大学・アルザス日本学研究所主催 シンポジウム報告、および、公募研究報告にたいする講師

申琪榮 (IGS 准教授)

<委員>

日本政治学会分野別研究会「ジェンダーと政治研究会」  
韓国ソウル大学日本研究所「日本批評」海外編集委員  
韓国ジェンダー政治研究所研究委員

<講演等>

1. 『女性参政権70年記念シンポジウム：女性を議会へ、本気で増やす』「韓国・台湾の女性議員はなぜ増えたのか」パネル司会、上智大学、2016.4.10
2. 東北アジア歴史財団一在日韓国人研究者フォーラム共同セミナー、「日韓合意と日本軍「慰安婦」問題」横浜市 2016.5.30
3. ソウル大学 日本研究所 公開シンポジウム『脱戦後の思想と感性』、「グローバル視点から見た日本軍「慰安婦」問題」、2016.5.6
4. 北海道教育大学、公開講演、「ジェンダー・クォータ：21世紀型参政権運動に向けて」、2016.6.28
5. 久留米市女性週間記念事業くめフォーラム2016、『女性議員を増やそう～ジェンダー・クォータ制をめざして』講演、福岡県久留米市、2016.10.1.
6. 日本学術会議主催、女性参政権70周年記念公開シンポジウム『ジェンダー視点から選挙制度を問う』討論者、日本学術会議講堂、2016.11.12.

7. ソウル大学SSK (東アジア地域秩序研究会)・日本研究所共催『日本憲法改正論：何が問題で、どこへ向かう?』『不思議なクニの憲法』(松井久子監督)上映会及び討論会企画・討論者、ソウル大学、2017.2.16.

8. KOICA 開発協力連帯ジェンダー分科会主催「何を怖れる」(松井久子監督)上映会企画・討論者、ソウル市 性暴力相談所、2017.2.17.

9. 選択的夫婦別姓を実現する会・富山主催、『2005年韓国の家族法改正を振り返る：保守の反対論をどう乗り越えたのか?』講演、富山県高岡市、2017.3.12.

<その他>

- ・ソウル大学日本学研究所との研究交流
- ・学術雑誌『日本批評』14号特集責任編集長・共同研究プロジェクト『思想と言説』共同研究員
- ・ソウル大学SSK (Social Science Korea) 東アジア地域秩序研究会 共同研究員
- ・フランス・ストラスブール大学との研究交流 (足立真理子 IGS 教授と共同担当)
- ・韓国ジェンダー政治研究所との研究交流・台湾国立大学女性学研究プログラムとの交流
- ・韓国延世大学 国際大学院 Visiting Scholar

板井広明 (IGS 特任講師)

<委員>

経済学史学会 編集委員  
日本イギリス哲学会 幹事

<その他>

・パリ第2大学、パリ政治学院のグラントによる Nudge Project との共同研究

仙波由加里 (IGS 特任 RF)

<講師・お茶の水女子大学・大学院提供科目>

【科目】Special Lectures in Humanities and Sciences I / 2016 Ochanomizu University Summer Program : Japanese Culture and Society, Course 1: Gender in Japan and the Globalizing World (担当代表:小林誠・本学教授)  
・“Reproductive medicine and Gender” (7月8日) 担当

【科目】 Essential Ethics for Global Leaders (担当：石田安実・本学特任教授・後期博士後期全学開講科目)

・“Who should decide?: Dax’s case (Autonomy vs. Beneficence)” (第3回：6月28日)

・“Donor-conceived people’s right to know donor identity (Justice and non-maleficence)” (第4回：7月5日)

<講師 学外>

・桜美林大学 リベラルアーツ学群 後期通常授業

【担当科目】「アメリカ女性論」

・聖路加国際大学 単発講義 認定看護師教育課程

【科目】「看護倫理」

【担当】 医療における医療原則と医療倫理へのアプローチ (8月24日)

・聖路加国際大学 単発講義 認定看護師教育課程 (不妊症看護)

【科目】 生殖医療と社会

【担当】 生殖医療と倫理 (10月10日)

<委員>

・日本医学哲学・倫理学国際誌 編集委員会 委員

<講演等>

1. すまいる親の会 (AID で子どもを持った親、持とうとしている親たちの会)、タイトル：『海外のDI事情ードナーの匿名性はもう保障できない!』 (5月22日)

2. 東邦大学生命倫理シンポジウム報告、東邦大学全学部3年生 (約800名) を対象に講演、タイトル：『第三者の介入する生殖医療をとりまく倫理的・社会的問題』 (7月2日)

3. 臨床死生学・倫理学研究会 (東京大学・上廣死生学講座)、タイトル：『第三者の介入する生殖医療をとりまく倫理的・社会的問題』 (7月13日)

<その他>

・開智中学・高等学校 高校生の IGS 訪問対応 (11月16日)

・日本生殖心理学会 (JSRP) 生殖心理カウンセラー継続研修会、『生殖心理カウンセリングの倫理を考える』事例検討に関して、倫理専門家としてコメント提供 (平成29年2月18日)

臺丸谷美幸 (IGS 特任 RF)

<委員>

・情報文化研究会 (AIC、本部：國學院大學) 運営委員

<講演>

1. “Rethinking of Japanese American Resettlement and Military Service in 1950s: The Citizenship of a Californian *Nisei* Soldier in the Korean War in *From Internment, to Korea, to Solitude: Memoir of Robert M. Wada.*” Asia-Pacific Studies Seminar at Osaka University, 大阪大学、平成28年9月23日

2. 「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍経験：ポストコロニアル的視座からの検討」ポストコロニアル法理論研究会第4回研究会、明治大学、平成28年11月21日

<その他>

・大阪大学言語文化学部 (杉田米行研究室) との交流

・カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) アジア系アメリカ人研究科教員 (レーン・リョウ・ヒラバヤシ教授、ヴァレリー・マツモト教授) との交流

・カリフォルニア大学バークレー校 オーラル・ヒストリー・インスティテュートとの交流 (平成28年8月15-19日訪問、同研究所 Summer Institute 参加)

## 8. 文献・資料収集 / 情報提供 / 閲覧活動

### 1) 主要収集資料

文献資料収集・整理、寄贈図書の受け入れをおこなった。

### 2) リファレンスサービス資料及び情報の提供・閲覧・貸出・常設展示

■ コピーサービス：常時附属図書館情報サービス・情報システム係で担当

■ ホームページ (和文・英文) の更新実施

■ 図書以外に関する情報提供

### 3) 図書・資料寄贈 (敬称略)

掲載は、日本語文献：寄贈者名『書名』(著者名)、外国語文献：寄贈者名 書名 (イタリック) (著者名) の順とした。

## &lt;日本語文献&gt;

仙波由加里『諸外国の生殖補助医療における法規制の時代的変遷に関する研究：平成27年度厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究事業』（日比野由利編）、早稲田大学ジェンダー研究所『ジェンダー研究／教育の深化のために：早稲田からの発信』（小林富久子、村田晶子、弓削尚子編）、昭和女子大学女性文化研究所『女性とキャリアデザイン 昭和女子大学女性文化研究叢書 第10』（昭和女子大学女性文化研究所編）、ジェンダー研究所『IGS Project Series 2. はたして日本研究にとってジェンダー概念は有効なのか？：人類学の視座から改めて問う：国際シンポジウム：Concept of Gender, Valid or Not?：Reconsidering from the Field of Anthropology of Japan: International Symposium』（棚橋訓、吉原公美編）、国枝たか子『世界のダンス2 百カ国を結ぶ舞踊文化』（国枝たか子編）、ジェンダー研究所『北海道大学大学文書館年報』（北海道大学大学文書館編）、ジェンダー研究所『私たちは忘れない朝鮮人従軍慰安婦：在日同胞女性からみた従軍慰安婦』（従軍慰安婦問題を考える在日同胞女性の会（仮称）翻訳編集）、ジェンダー研究所『韓国女性問題資料集8 隠ぺいされた歴史に今こそ光を！「朝鮮人従軍慰安婦」』（在日韓国民民主女性会翻訳）、ジェンダー研究所『フェリス女学院150年史資料集 第4集 加藤豊世・布施淡往復書簡：明治期のある青春の記録』（フェリス女学院150年史編集委員会編）ジェンダー研究所『山川菊栄が描いた歴史：山川菊栄生誕125周年記念シンポジウム記録集』（山川菊栄記念会編）、ジェンダー研究所『アジアにおける再生産領域のグローバル化とジェンダー再配置』（国際移動とジェンダー研究会編）、ジェンダー研究所『「慰安婦」問題国連関連文書』（売買春問題ととりくむ会）、ジェンダー研究所『IGS Project Series 3. 特別招聘教授プロジェクト特集：Special issue on Specially Appointed Professor Project』（マリー・ピコーネ＝Mary Picone、吉原公美編）、ジェンダー研究所『世界を創る女神の物語：神話、伝説、アーキタイプに学ぶヒロインの旅』（ヴァレリー・エステル・フランケル著；シカ・マッケンジー訳）、ジェンダー研究所『IGS Project Series 6. 特別招聘教授プロジェクト特集 = Special Issue on Specially

Appointed Professor Project』（スーザン・D・ハロウェイ＝Susan D. Holloway、吉原公美、和田容子編）、ジェンダー研究所『IGS Project Series 5. 家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較：国際シンポジウム：Family, Work, and Well-Being in International Perspective: International Symposium』（編集：吉原公美、和田容子）、ジェンダー研究所『中国のメディア・表象とジェンダー』（中国女性史研究会編）、ジェンダー研究所『被爆70年ジェンダー・フォーラム in 広島「全記録」ヒロシマという視座の可能性をひらく』（ひろしま女性学研究所)

## &lt;外国語文献&gt;

ジェンダー研究所 IGS Project Series 1 IGS Seminar：Choice and Consent in Prenatal Testing, (Yukari Semba.)

# お茶の水女子大学ジェンダー研究所『ジェンダー研究』

## 編集方針

(2016年12月改定)

1. 本年報に論文、研究ノート、書評、ジェンダー研究所の事業に関する報告（研究プロジェクト報告等）、彙報の各欄を設ける。
2. 本年報の掲載論文は、投稿論文と依頼論文から成る。
3. 投稿論文は、投稿規程第4条により、査読の上、編集委員会が掲載の採否を決定する。
  - 3-1. 投稿論文1本に対して査読は2名以上で行うこととする。
  - 3-2. 査読者は、原則として、編集委員会のメンバー、また必要に応じて学内外の専門分野の研究者から選定する。投稿論文執筆者が本学大学院生である場合にはその指導教官を査読者に加える。
  - 3-3. 投稿論文には番号を付し、執筆者名は伏せた状態で査読を行う。
  - 3-4. 査読結果は共通の査読評価用紙を用い、定められた基準により評価する。
  - 3-5. 掲載決定日を本文末に記す。
4. 依頼論文、ならびにジェンダー研究所の事業に関する報告は、編集委員会で閲読し、必要に応じて専門分野の研究者の助言を求めた上、編集委員会が掲載の採否を決定する。
5. ジェンダー研究所の事業に関する報告のうち、編集委員会が論文として掲載することが適当であると判断した場合には、投稿論文に準じて査読を行った上、論文として掲載することがある。
6. その他各号の枚数、部数、企画等、年報の編集に関する諸事項は、編集委員会が検討の上、決定する。
7. 『ジェンダー研究』に掲載された内容は全てジェンダー研究所のホームページおよびお茶の水女子大学教育・研究コレクション TeaPot に登録、公開される。
8. 投稿論文や研究ノート等には、英文要約を添付する。200語以内とする。
9. 投稿論文や研究ノート等には、その内容を的確に表すキーワードを英語と日本語で付ける。それぞれ5語以内とする。
10. 翻訳投稿をする場合、原則として論文「解題」を行う。

## 投稿規程

(2016年7月4日改定)

1. 『ジェンダー研究』の内容は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。
2. 投稿者は、原則として、本学教職員・大学院生・研究生・研修生・卒業生、本研究所の研究員、研究協力員、および本研究所長が認める本研究所の活動に関係の深い研究者（研究プロジェクト参加者、研究会報告者など）とする。
3. 投稿する原稿は未発表の初出原稿とする。
4. 投稿原稿は完成原稿とし、レフェリーによる審査の上、編集委員会が採否を決定する。
5. 投稿申し込みをした後で投稿を辞退する場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。
6. 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表その他が多い場合には、執筆者による自己負担となることがある。

7. 掲載原稿は、抜き刷りを贈呈する。なお、それ以上の部数については、あらかじめ申し出があれば執筆者の自己負担によって増刷できる。
8. 原稿執筆における使用言語は原則として日本語または英語とする。日本語／英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。
9. 投稿原稿は原則として、
  - 9-1. 日本語の原著論文は注・図表を含めて20000字以内、  
英語の原著論文は注・図表を含めて8000語以内、
  - 9-2. 日本語の研究ノートは注・図表を含めて15000字以内、  
英語の研究ノートは注・図表を含めて6500語以内、
  - 9-3. 日本語の研究活動報告は注・図表を含めて6000字以内、  
英語の研究活動報告は注・図表を含めて4500語以内、
  - 9-4. 日本語の書評は4000字以内、英語の書評は1600語以内とする。
10. 日本語については当用漢字とし、現代仮名づかいを用いる。なお、引用文等に関して旧漢字、旧仮名づかい等の問題が生じる場合には、前もって申し出ること。
11. 論文等の提出時には、名前、論文タイトル（副題も含む）の英語表記も表紙に記しておく。ただし、タイトル等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある。
12. 図・表・写真および特殊な文字・記号の使用については編集委員会に相談すること。
13. 原則として原稿はワードプロセッサで入力し、原稿を印刷したもの2部を提出すること。原稿のデータファイルCD-R等の媒体に記録して、それを添付して提出のこと。
14. 図・表を使用する場合は、同一ディスクに別ファイルを作成する。
15. 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める〈『ジェンダー研究』執筆要項〉に従う。
16. 翻訳の投稿に関しては、投稿者が原著者から翻訳許可の手続きを行い、許可取得後に投稿する。そのさいの費用に関しては投稿者が負担する。なお、翻訳投稿をする場合、原則として論文「解題」を行う。
17. 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、ジェンダー研究所の許可を必要とする。
18. 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。そのさいの費用に関しては投稿者が負担する。
19. 投稿論文や研究ノート等の最終原稿<sup>(※)</sup>には、
  - 19-1. 英文要約を添付する。200 words 以内とする。なお、英文原稿の場合は、要約を日本語としてもよいが、事前に確認のこと。
  - 19-2. 内容を的確に表わすキーワードをつける。5語までとする。

(※) 掲載決定後に修正した原稿を指す。

## 編集後記

お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報『ジェンダー研究』第20号をお届けする。執筆者をはじめ、査読を担当頂いた先生方、日本語校正者（加美芳子様）、英語校正者（(株) ジャパンジャーナル Alex Hendy 様）、印刷・製本を担当頂いた（株）よしみ工産様、その他、本誌作成に尽力頂いた皆様のおかげであり、ここに厚く御礼申し上げます。

今年度の特集は2015年12月1日に本学で開催されたIGS国際シンポジウム「ジェンダーで見る新自由主義・政策・労働——社会的再生産はいかに行われるのか？」での議論が基となっており、シンポジウム登壇者が、当時の報告を基にあらためて書き下ろした論文である。特集は「序——新自由主義と社会的再生産のジェンダー分析」（足立真理子）と以下3本の論文、“Changing Norms of Social Reproduction in an Age of Austerity” (Susan Himmelweit)、「ネオリベラリズムとジェンダー」（上野千鶴子）、「新自由主義とフェミニズム——女性主体の変化から」（伊田久美子）から構成される。これらはジェンダー、フェミニズム視座からの新自由主義批判と考察であり、序論で足立氏が解説する通り「総括的な問題提起と討論」にあたる。今後、これらの論文において提示された考察を基に、広く議論の発展が期待されるものである。

特別寄稿は、作家姜信子氏の『八尾比丘尼の話』を掲載した。姜氏と本研究所、また私（臺丸谷）との縁は、2016年7月29日に開催されたIGSセミナー「訳者と語る『京城のモダンガール——消費・労働・女性から見た植民地近代』」にて、姜氏が講演者を務めたことに始まる。今回は、書き下ろしをご寄稿頂いた。植民地と近代、外地、辺境、水、生命、と様々なテーマを喚起させる、珠玉の一文である。例えば、「東の海のミカンの花咲く島」における齒の話は、韓国濟州島で起きた四・三事件（1948年）を想起させる。だが、その解釈は読者一人一人に委ねられているだろう。姜氏は「声は聞かれなければならないのです、物語は取り戻されなければならないのです。」と書く。「女」、「他者」、「被植民者」たちの「消された声」に耳を傾け、拾い集め続けること。それはまさに長い間、フェミニズム、多くのフェミニストたちが続けてきた活動や、目指してきた信念とも共通するだろう。

投稿論文は、今年は厳正な査読を経て、3本が採用された。「日本企業で働く女性外国人社員のジェンダーとキャリア形成」（鈴木）、「『男性不妊』という経験」（竹家）、「秦代・漢初における〈婚姻〉について」（佐々木）と、元女子留学生の就労状況とキャリア・パス、男性不妊とジェンダーに関する社会学的分析、中国古代史におけるジェンダーという、大変ユニークで、先端的なジェンダー論である。様々な専門領域の研究者による既存の研究枠組みへの挑戦、そして精鋭な議論の提供は、日本における今後のジェンダー研究の発展を考えるにあたり、喜ばしい限りである。

書評は投稿4件（林、尹、宮内、横山）と、編集委員を務める本学教員による寄稿2件（森、申）を収録した。人文科学・社会科学・自然科学領域に至るまでの幅広いフェミニズム、ジェンダー学の先端動向を紹介できた。執筆者の協力に感謝したい。

また、本誌編集委員長である足立真理子氏は、この第20号をもってその職を辞する。第10号から10年間、編集長の任にあった。編集委員会を代表し、ここに厚く御礼と心からの感謝を伝えたい。

一刻一刻と変わる世界情勢、「ポスト真実」的なことがらが横行する中であっても、フェミニズム・ジェンダー研究者として、真偽を見極める眼を養っていきたい。今後も『ジェンダー研究』が刊行され続け、

そして様々な議論を喚起する雑誌として成長していくことを願ってやまない。そのためにはこれからも皆様からの幅広いご指導、ご支援、ご協力を引き続き賜りたく願う。

末文となったが記念すべき第20号に編集事務局として携われたことを幸いに思う。

編集事務局 臺丸谷 美幸 (IGS 特任リサーチフェロー)

お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報  
『ジェンダー研究』

第20号 編集委員会

編集委員長	足立真理子	ジェンダー研究所 教授
	石井クンツ 昌子	ジェンダー研究所 所長、基幹研究院人間科学系 教授
	申 琪榮	ジェンダー研究所 准教授
	天野 知香	基幹研究院文化科学系 教授
	荒木美奈子	基幹研究院人間科学系 准教授
	水野 勲	基幹研究院人間科学系 教授
	森 義仁	基幹研究院自然科学系 教授
編集事務局	臺丸谷美幸	ジェンダー研究所 特任リサーチフェロー

---

平成 29 年 3 月 11 日 印刷  
平成 29 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 お茶の水女子大学ジェンダー研究所

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1  
TEL 03-5978-5846  
FAX 03-5978-5845  
Email [igsoffice@cc.ocha.ac.jp](mailto:igsoffice@cc.ocha.ac.jp)  
URL <http://www.igs.ocha.ac.jp/>

印刷・製本 株式会社よしみ工産（東京事務所）  
TEL (03) 5802-5601 (代)  
FAX (03) 5802-5603

---